

## 今日的課題研究・防御ラインの考察

世界は、「継続とスピード」のレベルを上げるだけでは突破できない完璧な防御に対して、wisely なキックで活路を見いだそうという時代に入りました。歴史は繰り返されると言いますが、古い欧州型を思わせるものがあって、継続・スピードとの組み合わせは興味深いものです。

この期に及んで、後進性を発揮して、拙劣な防御とレベルの低い「継続とスピード」のまま、表面的な世界の流れに追随して、キック多用のゲームをするならば、世界との差は益々開くばかりで、ラグビーの本当の面白さを体得しないプレーヤーが育ち、ファンはラグビーの面白さを見失ってしまうであろうと危惧しています。キックを wisely に活用する前に、「攻撃の継続とスピード」のレベルアップが先決問題であるということを確認した上で、防御レベルを高める方策を確かめましょう。

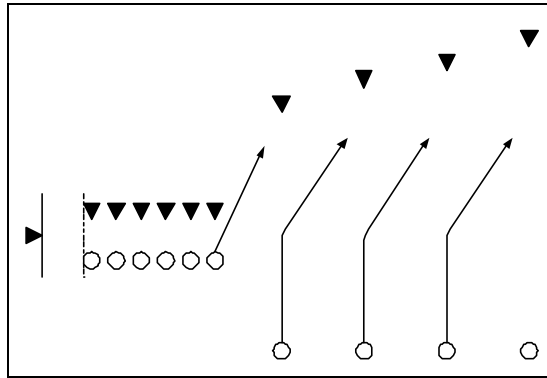
過去のラグビーにおける攻撃は、深い位置から、個人技を活かした、単調な突破作戦が特徴でした。現代ラグビーの攻撃は、浅い位置から、個人技とエキストラマン活用など、組み技を混ぜて、スピーディにプレーを継続してトライを取り合うのが特徴です。

防御は攻撃に対応して行なわれるわけですが、攻撃の方法やその特徴の発生は、攻撃が先か防御が先か判明しないことが多く、防御の発達が新しい攻撃法を生み出すこともあるのです。今日の防御は、現代ラグビーの攻撃の特徴をもとに、実戦的には攻撃対応策として次のようなことが見られます。

- (1) 浅い位置からの攻撃に対しては、  
off-side にならないようにできるだけ前の位置からできるだけ前に出る
- (2) 個人とエキストラマンによる突破に対しては、  
個人対個人を原則にしつつ、エキストラマンに対応するプレーヤーを生み出す  
aggressive tackle で継続を阻止する
- (3) スピーディなゲーム展開に対しては、  
1対1の確実な防御だけでは不十分だから、相手に負けないスピードで対抗する
- (4) プレーの継続による攻撃続行に対しては、  
一旦きめた型（計画）とおりにいかなくなるから全員で防御の補充につとめる

防御の基本的理論は次の4つです。

- (1) MAN FOR MAN DEFENCE  
man to man と言っていたものです。100%固定的な1対1といかないので言い方を変えたわけで、1対1で確実にタックルするものです。
- (2) ZONE DEFENCE  
1本の線上に防御のZONE（分担範囲）を決めて、防御の欠落する空間のないようにするものです。  
別に TACKLE ZONE という言葉もありますが、意識的に相手の攻撃のある地帯（zone）に追い込んで攻撃を封じこめる場合のことです。
- (3) DRIFT DEFENCE  
状況によって、1対1をずらして防御網をつくるものです。  
Drift（詰める）方法は合理的防御として一般化していますが、典型的なものはラインアウトの場合です。



上記の図のように、drift は吹き寄せという意味で、流れ（向き）に沿って詰めるものです。詰めることによって1人余り、余ったプレーヤーが次の必要プレーをすることができます。

内側へ詰めるのは、流れに乗っていないから drift ではありません。穴を埋める場合は bury か fill というべきで、現実的には埋めることによって1人足らなくなるのです。

- (4) キックに対する BACK3 の連係防御  
 大きいキックに対しては防御ラインではなく BACK3 の課題です。

基本的防御を実践的に考察しましょう。

- (1) ゲームは un-formula 不定型という意識が第一です。
- (2) 攻撃ラインと防御ラインの間にあるゲインラインを前方へあげるといことは、攻撃側からの理論ですが、防御側にとっては大きなリスクです。
- (3) 深い位置から突進に対しては1対1でタックル。
- (4) 浅いラインで横変化によるフラットパスにそなえて zone line 上の幅間隔の調整。
- (5) 相手がスペースを繕うとしてくる場合は、全員一体となって、防御ラインに穴のない zone defence をベースに DRIFT して、ゲインラインより少し前で一線を形成する。  
 FW・BK 混然一体となる

応用問題が2つあります。

- (1) 基底となる流れは、内から外への動きです。  
 内から外へずらして drift するのです。  
 スイッチパスに対しても内から外の流れで、防御ゾーンの変更はしない  
 内側の zone に味方が居ない（穴になっている）場合は内へ「埋める」
- (2) インターセプトの効用と対策  
 インターセプトは偶然に起きることもありますが、根本的には意図的というか、狙ってするものです。浅い攻撃ラインに対しては常にチャンスがあります。  
 攻撃側は常にその危険にあることを忘れず、山かけ気味に狙っている相手の裏をかく冷静さが大切です。